



愚中に活路

豊田工業高等専門学校 校長 鬼頭幸生
名古屋大学 名誉教授

最近は人気若干落ちているそうであるが、落語には根強い存在感がある。落語を単なる笑い話としてとらえてしまうと、数回も聞けば飽きてしまう。それだけでは、江戸時代から今日に至る長期にわたって、盛衰はあるにしろ人気を保ち続けることはできまい。落語はたしかに面白く、おかしいのであるが、その根底に人の心にひそむ愚かさ、逆に人情の温かさのようなものがある。笑いを誘うといっても、本当は自分は認めたくない愚かな部分を拡大して話してもらって、大笑いすることによってその部分を消毒するような爽快感をもつのである。人情の温かさを耳にして生きる力を得たり、喜びを感じたり、そうありたいと再認識しているのではあるまいかと思う。だから落語には深いところに説教成分が潜在しているし、遠く上古以来のあらゆる昔話、伝説、説話などの痕跡が認められるといわれる所以である。落語は4000話くらいあるというのであるが、五代目古今亭志ん生（昭和48年没、84才。好き嫌いを別にして名師匠）によれば、噺には相撲のように番付けがあって、その大関格というと「あたま山」という噺だそうである。これは大要、次のような噺である。

『あるところに物惜しみの激しい男がいる。桜の花見はとかく物入りだから避けて、花がすんで葉桜になってから見物に行く。折りからさくらんぼがなっており、これを食べる。1年経つとその男の頭から芽が出てきて、そのうち立派な桜になってしまう。この桜が満開になると頭のうえに花見客が押しかけてきて飲みや歌えや、喧嘩だと大騒ぎでうるさくてかなわない。それで、この男は桜を根こぎにしてしまう。跡に穴ができて暫くすると雨水がたまって大きな池になる。あたまが池という。そのうち魚がわく。そうすると釣師が集まったり、夏には夕涼みに人が出て花火があがるとなると、どうにもしようがない。とうとうこの男はある晩、女房に書き置きを残して、自分で自分のあたまが池に身投げをしてしまう。』

閑話休題。世の中は情報化時代といわれている。なるほどコンピュータによる情報処理技術は素晴らしいし、ネットワーク化してエンジニアリングもエコノミックスもやり方が変わってきている。とっているうちに今度はマルチメディアだという調子である。そういうものを通じて確にかつてよりは多量の情報をやりとりできるようになってきている。銀行からの支払受取が便利になったり、e-mail（Eメール）で世界中と連絡が便利になったりということはある。しかし実感として特に有用な情報にめぐりあえるようになったというものでもない。他方においてこれからは独創性のある技術開発をしなければならないという。独創的技術情報などというのは、いくらインターネットだといってもそんなところどころがっている訳がない。

「あたま山」の噺はそのところについてとても示唆に富んでいる。これは落語の中でも極めて独創性の高い構造になっている。この噺を創るという立場にたってみると、必要な情報は十分に盛り込まれている。そして落語の真髄を徹底的に追及して見事な噺になっている。私は今後技術者に求められる活動の指針をここにみるのである。必要な情報は人後に落ちないだけ入手しなければならない。しかしそれに基づいて、自分達の会社が対象としてきた技術の次のあるべき姿は何であるか、創造の橋を延ばしていく必要がある。「あたま山」も噺にはちがいないが、それまでにない新しい噺として創造されている。その心構えと全く同じでよいのである。次世代に向けて愚かなまでに試行錯誤をしながら家業を追及するところに活路があるのである。このようにいうといつまでも同じものにこだわっているのは問題だなどという人もあるかも知れない。そうではない。必要のない部分は、自ら切り捨てることもその中に含んでいる。この噺は無駄を切り落としてすっきりしているし、おしまいに主人公に奇妙な身投げさせているのも再生を象徴するようで、暗さを全く感じさせない。

それにしても、自分で自分のあたまが池にどうやって身投げをするのかな？、これが落語の「考えオチ」というものである。